

〔研究ノート〕

## 社会学的記述における二重の関係について —ドロシー・スミスに依拠して—

上谷 香陽

〔Research Notes〕

### On Double Relation In Sociological Description

Kayo UETANI

#### Abstract

Based on Dorothy Smith's article on sociological description (Smith 1990b:86-119), this paper considers the meaning of writing the social in her institutional ethnography. In this article she reconsidered the indeterminacy problem between what actually happened and its sociological description. This problem was discovered when Smith and her colleague Nancy Jackson were involved in a research project of the social organization of news in a newspaper. In the course of research, they found that news was to be seen as an organizational accomplishment and as far from a simple relation to the events it claimed to represent. At the same time, Smith realized that this problematic of her research became a problem for her own research work. The very status of sociological description in her own work should be reconsidered. Based on the discussion of ethnomethodology, Marx and Wittgenstein, she formulates an alternative way of thinking of the problem of sociological description. From the view of language-game theory, the indeterminacy problem would come up from the confusion of the practices of one language-game with those of another language-game. Smith suggested that we could take an alternative way of sociological investigation which explores how these practices of different types of language-games are related. Following her argument, this paper considers an alternative descriptive strategy which makes use of the language of everyday life as the basis for different sociological description.

#### 1 はじめに—ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題

本稿では社会学的記述をめぐるドロシー・スミスの議論(Smith 1990b:86-119)に依拠しながら、彼女の提唱する *institutional ethnography* における社会的なものを書くことの意味について考察する。

社会学的記述をめぐるこの論考を、スミスは、自分が関わった、知識の社会的組織化についての ある調査プロジェクトから生じた諸問題について述べる事から始める。このプロジェクトは、実際に起こっていることと、テキストにおいて与えられたそれら起こっていることの実事報告の間に挿入されている社会的、技術的諸過程に関するものだった。それは、ナンシー・ジャクソン(Nancy Jackson)とともに行った、新聞におけるニュースの社会的組織化に関する研究だった(Jackson 1974)。この調査のアプローチは、エスノグラフィー的なものだった。この調査は、あまり大規模ではなかった。観察的ワークの大部分に責任を持っていたのはジャクソンであり、スミスは彼女と

インタビューを共有した。探究の過程で、自分たち〈の〉調査のプロブレマティクは、自分たちの調査〈のための〉一つの問題になった。ニュースの事実性、内容、構造が組織的達成として、そして、それが表象していると主張する出来事との単純な関係とはとても言えない状態として、みなされうるならば、同じ問題が自分たち自身の仕事にも適用されるのではないか？〈私たち〉の記述の地位はどのようなものか？とスミスは問い直すことになったのである。

スミスはこの問いを、エスノメソドロジー、マルクス、ヴィトゲンシュタインなどの議論に依拠しながら、異なる「言語ゲーム」間の関係という論点として発展させる。「社会学的記述は、それが表象していると主張する出来事を文字通りの意味で指示していない」という問題は、異なるタイプの言語ゲーム間の関係を、それらの言語ゲームが埋め込まれている社会諸関係に着目して考察することによって解明できる。この「問題」は、それ自体社会学的探究の一つの論点として捉え直すことができるのである。「社会学的記述は、実際に起こったこと、そこにあったこと、あるいは何らかの記述可能な現状を表象しているのか」という問題は、部分的には、一つの言語ゲームの実践活動を別の言語ゲームの実践活動と混同していることによって生じているのである。そして、それらの言語ゲームの実践活動がどのように関係しているかを理解する時に、同時に、以下のことも理解し始められるとスミスは主張する。すなわち、第一に、いかにして私たちは、記述によって意図されるアクチュアリティに、その中でその記述が生じるところの社会関係の特徴を帰属させてきたのかということであり、第二に、いかにして私たちは、日常生活の言葉の使用を〈支点〉とする別の記述戦略へ進むだろうかということである。

## 2 いかにして記述されるべき世界は存在するのか

スミスによれば、「社会学的記述は、実際に起こったこと、そこにあったこと、あるいは何らかの記述可能な現状を表象していないのではないか」という批判は、それ自体一つの社会学的探究の論点になると。それは、記述を行う、聞く、読む私たちの実践活動を、いかにしてこれらの実践活動が私たちと私たちが話すことの間にはさまれるかを同定するために、解明することを含む(Smith 1990b:91)。スミスの探究は、これらの実践活動が、記述されることに対する私たちの関係を構造化するやり方の中に、一つの問題を見出す。その上で、エスノグラファーが場面の言語使用を学ぶやり方や、それらの場面で適切に意味する方法を学ぶやり方に直接的に明示的に依拠する、社会学的記述と解明の方法を示そうとするのである。スミスは、「世界はそこにある」と言う。それは、社会学的探究とは独立にそれ自体定義する世界である。それは、その世界が実際に組み立てられているやり方を回復することを目的とする方法によって、これから発見されなければならない世界である。社会的に組織化された一連の行為としての場面、社会諸関係としての場面について学ぶことは、形式上、エスノグラファーが行うどんな記述にも先立つ彼女のワークだ。スミスが目指すのは、私たちが行うであろうあらゆるありふれた記述ワークに先立つ、実践的で暗黙の必須条件を解明する記述の方法なのである(Smith 1990b:92)。

前述の調査の最初、スミスとジャクソンは、記述過程への入り口として、新聞社の日常世界のカテゴリーから始めようとしていた。彼女たちは、元々は、現象はそれらを指示するカテゴリーと対応して構成されるという考えで仕事をしていた。したがって、場面で使用されているカテゴリーを取り上げ、場面の特徴を記述することから始めた。そして、ニュース・ルームの実践活動において、それらのカテゴリーが名づけていそうな現象がいかにして構成されるかを見出すことで、

それらを土台にしようとした。その用語が同定していそうな現象が、いかにして場面のメンバーの実践活動において達成されたかを見つけようとしたのである (Smith 1990b:95)。しかしずいぶん後になって、スミスたちは、このやり方が間違っていたと気づくことになったというのである。

スミスたちがこのようなやり方で焦点を合わせたのは、「割り当て (assignment)」という言葉だった。ニュース・ルームの組織化において、地方記事編集長や地方記事編集部は、記者たちが働く勤務時間の間の仕事として、かれらにストーリーを「割り当てる」。「割り当て」を構成する実際の実践活動を考察するエスノグラフィーを行おうとする過程で、スミスらは、まるで自分たちの目的はそれを記述することであるかのように、「割り当て」なるものを構築し始めたのだという。自分たちの観察手続きは役に立ったが、その目的は問題だったとスミスは振り返る (Smith 1990b:95)。スミスらは記者たちが「割り当て」について話すやり方、あるいは「割り当てる (assign)」などの関連する動詞を使うやり方を記録し続けた。彼女たちはやがて、自分たちが、すぐにはそれを理解することができないようなニュース・ルームで見聞きしたことがらの集まりを持っていることに気がついた。それは次のような言い方だった。「誰それがこのストーリーを割り当てられた」「このストーリーは、誰それに割り当てられた」「私はとても多くの割り当てを持っている」。「割り当てとはなんですか？」とエスノグラファーがたずねると、彼女はタイプされた文章が書いてあったり、何か殴り書きされた紙を見せ「これが割り当てです」と語った。これらは、「割り当て」や「割り当てる」の当たり前前の使い方だった。それは、ニュース・ルームの実際の作動する (working) 実践活動の知識なしには、直ちに理解することができないものであった (Smith 1990b:96)。

それらの言い方の集まりを使って、さらなる探究の基礎のために、スミスらは割り当てとして記述可能な「何か」を構築し始めた。例えば「割り当ては、ニュースの集積における資源の組織化を使用し展開する権限である」などと述べた。自分たちが間違いをおかしていたと突然気づいたのはこの時だったとスミスは言う (Smith 1990b:96)。スミスらが行ったのは、実際の作動する場面において自分たちが見つけた「割り当て」の多様な使い方から、その言葉の使い方のすべてのタイプに備える一般的な記述手続きを始めるという、次の段階に進むことだった。これらの例のすべてを指示し、もう一度話すことを可能にする定義を見つけ出したのだ。つまりスミスたちは、「割り当てること」「割り当て」を、社会学的カテゴリーとして構成したのである。

そうすることをとおして、スミスたちは、社会学的言説に入ることができたのだ。今や彼女たちは社会学者として、「割り当て」について、それを組織の特徴として話すことができるようになったのである。スミスらは、情報提供者の観察やインタビューから、ある概念的組織化を発展させた。それは、実際の一連の行為や実際の社会諸関係から、そのカテゴリーについての無制限の一連の例を組織化し組み立てる。彼女たちは、今や、観察され記述されたアクチュアリティから自分たちの社会学的分析を読む方法を知っているし、観察したことを自分たちの分析のカテゴリーの表現として読むやり方を知っているのである。

この段階に到達して、スミスたちは自分たちのやってきたことを改めて振り返った。そして、自分たちは、社会学を行う方法において、自分たちがそこから抜け出そうとしてきたまさにその状況に陥っていることを理解したのである。スミスは自らがかつて批判的に考察した、「概念をそれが表現する実際の社会諸関係から切り離すための方法としての、イデオロギー的形式 (Smith 1990a:60-80)」を作り出すことに、自ら関わっていたことに気がついたのである。この問題は、部分的には、自分たちが方法の土台を考えるやり方から生じていたとスミスは言う (Smith 1990b:96)。スミスたちは、まるで実際に「割り当て」というカテゴリーがあるかのように、そして、自分たちの

目的は「割り当て」を現象として達成する実践活動を見出し記述することであるかのように、エスノグラフィーの仕事を進めていった。スミスらは実際、あるカテゴリー化を発見したのだ。それは、自分たちがニュース・ルームで見聞きしたこと、質問に対する答え、観察したことを、後から振り返って社会学的言説の「例」として扱うようなカテゴリー化であった(Smith1990b:97)。

スミスたちはこの結果に不満足だったが、最初のうちは、「割り当て」についての自分たちの記述を向上させようとする事で前進しようとしたという。最初は、そこにあるものを見て記述するやり方の指示としての、カテゴリー化手続きにとどまった。その手続きは、それに対して自分たちの発見物が従うべき枠組みを提供した。このようなやり方で進むことで、スミスたちはこの場において、実際の社会諸関係や組織化を取り戻そうという試みを無効にする記述の方法を使っていた。しかしながらこのことを乗り越えるには、時間がかかったのである。

スミスたちは、「割り当て」という用語について、それを使用する二つの文脈があり、それを読む二つの方法があるという問題を抱えていた。すなわちそれは、社会学的言説の文脈と、元々の場面における文脈だ。スミスらの目的は、元々の場面における社会的組織化を記述することだった。何らかのやり方で、社会学的記述の過程それ自体が、障壁や、歪める過程を挿入しているように見えた。元々の場面で一定の様式で使用される用語(あるいは一連の用語、「割り当てる」「割当」など)は、社会学的記述の文脈においては別の意味でやって来るのである。

スミスは、ヴィトゲンシュタインが哲学者のために行った勧めに従い、言葉を、それを記述することから、その日常の使用に戻す、という発想の転換を図る(Smith 1990b:98)。社会学的記述の言語ゲームは、弁別的な意味する方法として捉え直すことができるのである。社会学的記述を行うことにおいて使用される言葉は、元々の場面の言語(諸)ゲームから拾い上げられている。その元々の場面の言葉は保存されており、その「指示」は変化していない。しかしその使用、それが意味するやり方は、社会学的記述の言語ゲームにおいては、オリジナルにおいてとは異なるのだ。私たちは、言葉を、その社会学的使用から日常の使用へ、単純に戻すことはできないのである。

私たちは社会学者として、記述を行うとはどういうことかを自分は知っているとは自明視しているのだと、スミスは言う。この前提を括弧に入れる必要がある。記述を実践活動として利用可能にするためには、「成員としての私たちの実践活動」それ自体を解明するワークの方法を利用する必要がある。ある所与のテキストを記述として構成することにおいて、社会学者自身がアクティブなのだ。自分たち自身を主体としてこの過程に入れることによって、社会学的記述を達成している自分たちの方法がいかにして記述の産物の特徴を、「オリジナル」の特徴・特性と混同しているかに気がつくことができるようになる(Smith 1990b:98)。ひとたび記述を、読み手とテキストとテキストを通した対象の間のアクティブな関係として位置づけるならば、その関係の特徴はそれ自体、社会的に解明可能な論点となりうるのである。

### 3 二重の関係

もし私たちが、社会学的記述の言語ゲームと、日常世界におけるそのオリジナルの言語ゲームに取り囲まれているならば、二重の関係が見えてくるとスミスは言う(Smith 1990b:99)。二重の関係は、社会学者としての私たちのワークの特徴なのである。

この二重の関係を視野に入れる時、社会学的言説の意味生成の実践活動によって記述的言語が組織されるところで記述を行う際に生じる問題を、よりはっきりと理解できるようになる(Smith

1990b:100)。その文脈で、意味生成の実践活動は、目下記述しているオリジナルの場面において作動するやり方とは全く異なるやり方で「作動(work)する」。さらに、社会学的言説の言語使用は、元々の出来事の特徴づける言語使用の実践的諸文脈によって拘束されていない。諸カテゴリーの体系は元々の作動する用語(working terms)から形作られるかもしれない。そしてそれから、その諸カテゴリーは、それらの用語がもたらされた場面の社会諸関係とはほとんど関係のない諸関係を概念化するために、使われるかもしれない(Smith 1990a:60-80)。社会学的言説の諸カテゴリーは、それらがそこから取り上げられたアクチュアリティを指示しているように見える。実際、諸カテゴリーと諸カテゴリーの体系は、それらが名づけているように見えることを組織化する。ただし、それらが生じる日常の場面の社会的組織化とは一致しないようなやり方で、なのである。二つの分離された言語ゲームの背後では、一方にある一つの定式化された専門的言説や官僚的過程が、(そのような言説や過程がその概念的実践的管轄(jurisdiction)の内部で、名づけ、管理し、コントロールし、組織化しようとする)生きられた世界と対立しているのである(Smith 1990b:100)。

調査の過程において、そして、「社会学的」記述を生み出す自らの実践活動を考察していた時に於いて、スミスらは、ジャクソンのエスノグラフィー的ワークの過程で、3つの異なる種類のトークや文書(writing)が観察されうることを発見した。1番目は、ジャクソンが観察の過程で聞いたトーク、仕事をしている時や自分たちの仕事をめぐって/それについて他者と話している時にニュース・ルームにいる人々によってなされたトークがあった。スミスらのエスノグラフィー的焦点は、主として、地方記事編集長、地方記事編集部、「割り当て」に取りかかっている新聞記者たちのワークに置かれていた。当時これらのワークは、ほとんどがトーカー電話においてであれ、関係する諸個人の間であれ、タイプライターにおいてであれ—でなされていた。トークと文書はこのワーク過程の重要な局面だった。スミスはこれを「レベル1」のトークと呼ぶのである(Smith 1990b:100)。

ジャクソンが観察した2番目のレベルのトークは、彼女が「情報提供者」と話し、ある記述が彼女に与えられる時に特徴的に行われた。このタイプのトークは、場面の能力のある成員である誰かから学ぶという、エスノグラフィーの手続きのルーティンの部分としてなされた。そのような記述的トークでは、レベル1のトークにおいて見聞きされうるものと同じ用語が使用されていた。しかし、それはこれらの用語の異なる使用を生み出していた。さらに、このレベルの記述がエスノグラファーに対して生み出しうる意味は、非常にしばしば、ジャクソンが以下のことを学んでいたかどうか依存していた。すなわち、そのトークが1番目のレベルで作動した(worked)やり方と、1番目のレベルのようなトークを行うやり方である。これらのレベルの違いと、レベル2のトークがレベル1のトークに依存していることは、ジャクソンがレベル2の記述をスミスと共有した時に可視化されたという。ジャクソンの事前の知識を共有していなかったスミスは、記述を理解可能にするために、何が言われていたのかを彼女に完成(fill out)してもらわなければならなかったのである(Smith 1990b:101)。

情報提供者にとってのレベル2のトークは、ジャクソンがそのワーク過程や、レベル1のトークの文脈でもあり内容でもある一連の行為に、事前に馴染んでいることに依存していた。情報提供者が社会学者にレベル2において与えている記述、ガイダンス、情報は、レベル1の過程のワークを解明し注釈していた。レベル2において、レベル1のトークで使用された諸用語は、実践活動—その中に諸用語は「自然に」埋め込まれ、その中で諸用語の日常の使用が生じるのであるが—の外側で使用されていた。社会学者のワークは、彼女が観察し続けるであろうこと、おそらくすでに観察してしまったことを、情報提供者が話したこととして、情報提供者の記述によって「説明され」

「理解可能にされる」こととして理解するやり方を学ぶことだ。この後を見たり／先を見たりする (retrospective/prospective) 様式において、エスノグラファーがレベル2のトークについて生み出さる意味は、トークがレベル1でなされたやり方に依存していた。このトークや文書のレベルは、社会学的言説の一部であり、スミスとジャクソンがこの言説に参加し心に留めていたやり方の一部として行ったことであった (Smith 1990b:102)。

レベル2のトークは、スミスらがそれらを記述可能にする時には、社会学的言説と一致するカテゴリーや意味づけ実践活動の様式を含んでいた。記者と編集者は、まさに社会学者が行うようにニュースについての一般的言明を定式化しながら、社会学者に対して自分たちの仕事を省察していた。この時かれらが同時に行っていたのは、より専門化されておらずより「技術的」ではない形式ではあるものの、一つのカテゴリー化の様式であった。このカテゴリー化の様式は、記者や編集者が、社会学者に自分たちのワークについて、彼らの経験の場においてニュースを作ることがどのように組織化されているかについて話そうとしている時に行った、レベル2のトークと比較された。スミスは、社会学者と情報提供者の両方によって実践されるこのレベルのカテゴリー化と記述を、レベル3の言語ゲームと呼ぶ (Smith 1990b:102)。記者たちは、知識人に共有されたより技術的ではない言説を定義する、ずらりと並んだカテゴリーを使用した。このレベル3の言語ゲームの弁別的な特徴あるいは効果は、レベル1とレベル2でなされた種類のトークや意味を包摂し組織化することである。

スミスとジャクソンが興奮した「割り当て」という概念は、これら異なるレベルの言語ゲームを通過されていた。この概念はスミスらにとってレベル3で作用したと考えられるのである。そこでは、社会学的言説が働いていたのだ。この概念は、情報提供者による彼らのワークの場面の記述 (account) に基礎づけられているという幸福な見かけを持っていたのである。スミスらは、それをオリジナルの場面の「特徴」として扱えたのだ。この概念が、専門化されたワークを行うであろうレベル3の言語ゲームのタイプに到達することは、レベル2でのインタビューする手続きによって媒介されていた。しかしもちろんレベル3においては、この概念はもはや、記者や編集者たちのワークの場面におけるかれらのトーク (レベル1) の中で意味したことを、意味しないのである。

スミスによれば、これら3つのレベルは、レベル2の質問や記述過程によって媒介された社会諸関係の二つのセットを表している。これらのレベルを再び社会諸関係の中に位置づけた時、スミスらは、自分たち自身がこのワークの中に位置づけられているやり方を理解したのである。すなわち、レベル1は、極めて単純に、バンクーバー、ブリティッシュ・コロンビアのある新聞における、ニュース産出のルーティンがなされていたところにある。かれらが自分たちの仕事を片付ける時、かれらは場面においてあるいは電話で他者たちと話し、メッセージを書き、読み、ニュース・ストーリーを書く。レベル2のトークは、社会学的テキストへの途中でのみ生じるのである。ここでは、情報提供者と社会学者の両方が、記述的トークを行ったり聞いたりするアクティブで知識のある参加者として登場した。さらに、観察しながらニュースルームで過ごした時間の結果として、ジャクソンは以下のことを非常に良く知っていたのだ。すなわち、自分が観察した場面の情報提供者による記述をどのように扱うか、トークをその場面の記述としてどのように聞くか、自分のフィールド・ノートや第1次的 (primary) 記述の文書の基礎としてその場面についての彼女の知識になったことをどのように使うかということである。2番目のレベルは媒介する。2番目のレベルは、それ自体記述 (account) を産出している進行中のワーク過程の間を移り変わる。2番目のレベルは、一次的なエスノグラフィー的素材であれ、書き写されたインタビューのテキストであれ、テ

クストの最初のセットを作る。2番目のレベルは、その生産物が社会学的言説に入る時、次の段階（あるいはレベル）にとっての不可欠な契機なのである（Smith 1990b:103）。

通常、社会学者が社会学的記述を実践する時、社会学的記述は二重の関係についての合成され混合された産物なのだとスミスは指摘する。一方に、記述の資源になり、記述の根底にある決定を規定する、場面における実際の実践活動の組織化がある。もう一方に、エスノグラフィーを構造化する社会学的概念実践活動を使用している、社会学的企てがある。最終的な社会学的記述は、この混合の産物なのである。社会学的記述を一つの記述として達成するために不可欠な元の場面の実践活動は、この過程において置き換えられている。それによって、社会学的概念実践活動が、オリジナルの出来事の特徴と見えるのである。

#### 4 専門化(specialized)された言語ゲームとしての記述

もしこれらの実践活動が社会諸関係に埋め込まれていると理解するならば、そして社会学者自身がこれらの諸関係において自分たちの実践活動を組織化していると理解するならば、これらの実践活動が(私たち社会学者にとっての)記述のオリジナルになることを構造化するやり方について、自分たち自身の知識を社会学的に探査することができる、とスミスは指摘する（Smith 1990b:103）。社会学的に記述することは、一つの言語ゲームとして探査することができるのである。

ここで記述とは、「事実報告(factual accounts)」として同定される、社会学にとってなじみの実践活動の一つのことである。一般的に、事実的な読みの方は、以下のような特別な特徴を持っているとスミスは指摘する。すなわち、読みの中で読み手は、テキストから「反対側」のアクチュアリティへ「通り抜ける」のだ（Smith 1990a:60-80）。このことは、「事実の記述(factual accounts)」を読むことと、「フィクションの記述(fictional accounts)」を読むことを区別する。フィクションを読むことにおいて、テキストは読み手の自己と融合される。しかし、事実として読むことにおいては、テキストを超えて問われる世界が、読み手にとって生じてくるのである。事実的な読みの方は、読み手のために、その外にあるアクチュアリティを構成する。そこにはいつでも、書かれえたこと以上、それについて知りうる可能性がある。存在は、その完全性において、このアクチュアリティに帰属されるのである。帰属された「アクチュアリティ」は、与えられるだろうどんな記述(account)に対しても規範的だ。したがって、事実的な記述は、読み手がテキストを事実的なものとして達成する時に、彼女にとって生じてくるアクチュアリティによって訂正され、反論され、批判され、不適切で不十分に述べられたものとして見られることがあるのである（Smith 1990b:104）。

意味する実践活動や方法としての指示すること(referencing)は、記述するという言語ゲームにとって鍵となる。記述的報告(descriptive account)を読む時、読み手は意味を指示する方法を使用し、用語がテキストを超えて外にある何か一対象や行為一を意図しているとみなすのである。指示は、意味することそれ自体には不可欠ではないし、言葉が意味できる唯一のやり方ではない。指示は、意味することの一つの限定的な実践活動である。「これは一つの記述だ」と理解することは、社会学者に、情報提供者がここの外にあることについて話していると聞くように教えてくれる(instructs)。社会学者は、その記述の中に指示されていることを、まさにその通り受け取る。指示することは記述的言説と、それが意図していることとの関係を構成するのである。記述を読むという私たちの方法は、テキストを、オリジナルの事象の実際の状態から引き出されたものとして構成する。その用語は、何か外にあることを指示しているとして受け取られるのである（Smith 1990b:104）。

オリジナルの出来事が先行して存在することは、読み手の達成として捉え直すことができる。ある情報提供者が記述を与えているのを社会学者が聞く時、彼女は社会学者に何かについて話し、社会学者は彼女のその記述において指示されている「何か」のために彼女(の話)を聞く。社会学者がたずねる質問は、彼女のトークの前後で、何が話されているかを指摘するー「それについて何かもつと話してくれませんか?」。彼女が記述する時、社会学者はそれを、彼女の記述によって意図されるアクチュアリティを何らかのやり方で指示できるものとして受け取るのである。

他方、社会学者が現在それを行うやり方を知っているような、記述という言語ゲームは、ある奇妙なやり方でその手続きを歪めるのだとスミスは指摘する。社会学者は、ある用語を、その中でその用語が使用される実際の場面から取り出し、そしてそれをその場面の記述に差し込むのである。そうすることにおいて、用語が意味するやり方や、使用されている解釈の方法は、変更されるであろう。情報提供者のものであれ社会学者のものであれ記述においては、用語はその場面から引き離されている。用語がその一部であり、用語が場面それ自体において意味するやり方をコントロールする(そこではコントロールは、個人的過程ではなく社会的過程である)ところの社会諸関係は、抑圧されるのである(Smith 1990b:105)。

用語は、記述的過程がその実践活動であるところの別の社会関係の形式に差し込まれるのだと、スミスは指摘する。用語は、背後にある意味の破片を引きずりながら場面の記述の中に入っていく。それは、もしオリジナルの不在の場面におけるその意味の使用がテキストの中にどのように暗示されているかを分析しようとする時に、「言外の意味(connotation)」として記述されるかもしれないことがらである。この意味の破片は、記述されるべき場面の社会的組織化と社会諸関係において生じたことがらである。意味の破片は場面の組織化やそれらの諸関係の特徴を、記述的テキストに流し込む。ある意味で、その場面の社会的組織化や諸関係は、記述的テキストによって書かれうるあらゆる記述を決定すると言えるのである。

しかし、記述的ゲームにおいてねじ曲げられ、抜粋され、再配置された用語の使用や意味は、変えられている。読むことの記述的方法は、その用語と対応する、対象あるいは個別の実体のようなものを指示する(Smith 1990b:105)。前述のニュース・ルームの研究において、スミスは用語を、社会諸関係を「名付ける」ものとして考えていた(実際は、社会諸関係が、そのように名づけられた現象を構成するのだが)。記述するという言語ゲームは、指示し、対象を位置づけ組織化し、カテゴリー化するために、用語を使用する。意味のそのような組織化は、場面についてのテキスト的表象に、それがあたかも場面の組織化の特徴であるかのように「挿入される」。記述的読みの解釈実践を使用する読み手は、そのような意味の組織化を読み、表象されたオリジナルに立ち返るのである。

スミスらはニュースを作ることの研究において、記者たちに「ニュースとは何か?」という質問を投げかけた。記者たちが社会学者たちにニュースについて話す時、最も難しいとわかるのがこの質問であった。この質問はしばしば、社会学者が言うだろうことがらとして、記者たちがあらかじめ想定している問いでもあった。(レベル3のトークにおいて)かれらはこの用語のための指示手続きを見つけられると期待していた。ある時には、このことは、社会学者に自分で解けるだろう難問として呈示された。ある時には、記者たちは、全ての質問のうちこの質問に対する答えを見出せないーこの質問は、記者たちが最も容易にうまく答えられるだろうとみなされている問いなのだがーという自分らの無能力について熟考した。ニュースの作り手たちは、ニュースを同定するどんな種類の基準を与えることにも困難を見出していた。ニュースの作り手たちは、ここでは、記述的ゲームの文脈の中でニュースについて話していた。このゲームにおける読みの方法が、用語を取り、その



用語からかれらが何を話しているのか探していった。スミスらはかれらの話すことを聞く時に、指示手続きを使用した。スミスらが話しているニュースの作り手たちは、聞き手がそのような解釈方法を使っていると想定しながら、指示することを成功させる方法を探していったのである(Smith 1990b:106)。

ニュースの作り手たちは、記述するという目的のためにそれが何であるかを決定する、という問題を抱えていた。ただしそれは、記述するという目的にとってのみの問題だと、スミスは指摘する。かれらは、自分たちの実際の文脈でニュースという言葉を使うことにおいては、何の問題も持っていなかった。この悪評高い問題は、実際の使用の作動する(working)文脈においては(どんなやり方であれ)なにごとかを意味している用語が、意味することの指示ワークを一記述する文脈においてそれが必要とされている時に一遂行していないだろう時に生じるのである(Smith 1990b:106)。作動する用語(working term)としての「ニュース」は、記者や編集者の仕事と、新聞の生産過程や発行などの間の諸関係の、実際の組織化としてのみ定義される。ニュースという用語は、そのワークの一部であり、そのワークについて話すことにおいてワークを行うのである。それらの文脈において、ニュースという用語は特別なやり方で使用されるが、対象を記述するためには全く使用されていないのである。

記述する文脈においては、その用語を使って全く異なったことがらが行われているのだ。ニュースという用語は、あたかも、社会学者がフィールドに入っていけば大いに見つけられるはずの何かを名づけたものとして扱われる。社会学者が読みの記述的方法を使い、オリジナルの文脈から取り出され記述的ゲームに入れられた用語にこの方法を適用する時、彼女はその用語とオリジナルの間関係を再構築するのである。それが、スミスとジャクソンが仕事をしたやり方であった。スミスたちは、自分たちが使い方を理解していない、知らないたくさん用語とともに研究を始めた。それらの用語は、場面の成員たちによっては、馴染みのやり方で、因果的やり方で、満足のいくやり方で使用されていた。スミスたちは、名づけるために捕まえた現象が、ニュース・ルームの実際の諸実践活動においていかにして構成されたのかを発見しようとした。ニュース・ルームを、この読みの方法に従って、記述可能にしようとしたのである。

スミスたちは、「割り当て」という概念を構築するために、社会学的概念実践の知識を利用した。その概念実践は、「割り当て」「割り当てる」などの文脈化された使用を、一つの対象として構築したのである。このようにして、スミスたちが観察し、見聞きし、記述してきたことは、記述の言語ゲームによって要請される「対象」になったのだ。しかし、ひとたび、「割当て」や「ニュース」のような用語とともにある自分たちの経験を「いかにしてそれがワークしたのか」という側面として注目すべきだと理解すれば、異なるやり方で社会学を行う方法を発見することができるのだとスミスは主張する。別の戦略は、社会的組織化や諸関係の記述の中の、抑圧されているが暗黙の存在一諸用語のありふれた使用はその存在の中に参加していたのであり、諸用語はその存在を記述の中へ引きずって行ったのである一によって示唆されると、スミスは指摘するのである(Smith 1990b:107)。

## 5 一つの別の戦略としての、社会組織と諸関係の解明

記述的ワークを行う中で記述する人によって使用される方法は、社会的に組織化された諸過程一そこにおいて、その社会的過程の中で生起する対象や出来事などを名づけるために、諸カテゴリーが使用されるのである一についてのその人の知識によってコントロールされている(Smith

1990b:107)。彼女は能力のあるメンバーとして、オリジナルの出来事についての自分の知識を当たり前のこととして受けとめる。彼女はオリジナルの出来事を、それをさらに探査できる人として知っている。そして、いかなる記述的連鎖の中に含まれていることがら以上に、それが何であるかについて語るができる人として知っている。場面の特徴を構成する社会的に組織化された諸過程や、それら諸過程が接続し接続される諸関係についての知識は、記述する人が自分の記述を生み出すことにおいて依拠する背景の知識である。しかし彼女はその知識に、それが記述される形式において自分にとって客観化されていることがらとして、依拠しているわけではない。彼女は、すでに知られており、当たり前とみなされており、すでに組織化されているものとしてその知識に依拠する。そのような知識の組織化は、一つの拘束として、記述の中に「入っていく」。その組織化は、用語(理解可能に主張されうる諸関係)を話したり使ったりすることが彼女にとって意味あるやり方に関して、規範的である。その組織化は、しばしば、以下のような出来事(occasion)で最も際立って現れてくるとスミスは指摘する。すなわち、記述する人にとっては意味のわかる記述が、聞き手にとってはわからない、そして、記述する人は自分の記述に何が欠けているのか理解できない、という出来事である。あるいはまた、記述する人が聞き手の質問を「間違っている」と聞きうるやり方の中にも、そのような組織化が現れてくる。

場面の社会的組織化によって決定された根本的で不可欠なやり方において存在するもの無くして、特定の場面の記述が書かれえ、話されうるやり方はないとスミスは主張する(Smith 1990b:108)。その場面の社会的組織化は、記述する人が記述するやり方を知っていることの記述の中に、不可避に存在しているのだとスミスは指摘する。その社会的組織化は、記述する人にとってそのようなものとしては外在化されないし、観察可能ではない。作動している諸関係の中で社会的組織化が生起する時に、彼女はそれ(社会的組織化)をメンバー、実践者として—不完全にであっても—知っているのである。観察可能なことはそれらの諸関係に埋め込まれておりその中で生起するのであるが、この諸関係それ自体は観察可能ではないのだ。場面に対する記述する人の関係、彼女にとって場面が観察可能になるやり方、場面が作り出す意味、諸用語が意味するやり方、諸用語が使用されうるやり方は、彼女の記述的ワークに先立って組織化されているのである。それらのやり方は、記述する人が生み出しうるいかなる記述にも入っていく。というのも、彼女が生み出しうるいかなる記述も、諸関係—そこにおいて、場面の意味が、彼女にとって生起するのだが—の実践者としての彼女の暗黙の知識を前提としているからである。

テキストの意味は、その中では完全に解明されえないことに不可避に依存している。もし記述が、オリジナルの出来事における意味を作り出す実践活動によって決定されるとすれば、テキストにおける諸用語の使用は、記述される場面の社会的組織化やその過程においてこれらの用語が果たす役割によってコントロールされ、もしかしたら決定されていさえするかもしれないとスミスは指摘する。場面の社会的組織化は、暗黙のうちに、テキストの中に存在している。記述はこのことに言及してこなかったし、これを記述してはいない。しかし、何であれそれが記述することは(記述する人が、何らかのレベルで、その人が記述する場面の成員であるとすれば)オリジナルの場面の社会的組織化によって決定されているのだ。その社会的組織化は、記述の中に暗黙のうちに存在しているのである。スミスたちにとって、探究の最初に問題と見えたまさにその特徴(feature)は、むしろ、別の探究の方法を見つけようとする際には前提にされなければならないことがらを保証するものとして、捉え直すことが可能なのである(Smith 1990b: 108)。

オルタナティブの提案は、述べるのは簡単だが、行うのは難しいとスミスは指摘する。それは、

暗黙の社会的組織化を解明することによって進むのである。前述のニュース・ルームの研究において、スミスらは当初、オリジナルの出来事の言語を、記述的ゲームへ置き換えようとしてきた。しかし、諸用語は、社会的過程において構成される現象を同定しているというよりは、組織化された実践活動の「諸局面(aspects)」として捉え直すことが可能である。また諸用語の意味する方法は、そのような実践活動に統合され接続されるものとして捉えることができるのだ。それらの用語が元々の場面で意味するやり方は、その場面の組織化を学ぶ過程の一部として学ばれていくべきものである。ある場面において全くの初心者である段階で、どのように話すのかよくわからない、どのように用語を正しく使うのかよくわからないということは、よくある経験である。使用されている言葉は、不可避に、社会諸関係の位相(phase)を形作る活動の一部になっている。社会諸関係は、用語の使用にとって文脈ではない。そうではなく、用語の使用—用語がそこで意味するやり方—が、関係を形作っているまさにその活動の一部なのだ。したがって、その場面において言葉によって正しく「意味する」やり方を学ぶことは、場面を社会的に組織化するやり方を学んでいることなのである(Smith 1990b: 109)。スミスの言う「オルタナティブ」の社会学的探究は、まさにこの社会的組織化を解明しようとするものである。

## 6 記述的手続きの構築物としての「ニュース」とワークする用語としての「ニュース」

6-1) スミスは、ジャクソンとの調査をふまえ、この調査を行う際に自分たちが依拠したゲイル・タックマンの研究(Tuchman 1973,1976)を再考する。タックマンの手続きは、スミスたちが「割り当て」という概念を開発することにおいて従っていたのと本質的に同じものであった。タックマンの研究においては、いかにしてある特定の解釈が、記述的手続きの構築物としてみなされうるかが示されている。その記述的手続きによって、「場面の」諸用語は記述に置き換えられ、オリジナルの場面における指示する実体として読まれるのである。タックマンは、日常世界において起こっていることとニュースを作ることの間関係について、「スポット・ニュース(spot news)」「展開するニュース(developing news)」「継続するニュース(continuing news)」など、ニュース間の違いを記述することによって、一般的言明を導いている。例えば、発展するニュースについて以下のような記述がある。

発展するニュースは、「創発的な諸状況(emergent situations)」に関心を持つ。ある飛行機が墜落した。この出来事は予想されていないにもかかわらず、それに何とかして含められる「諸事実」には制限がある。ニュースの作り手は、これらの報告された死者が生き返ると述べているストーリーを書くことを予期していない。あるいは、墜落が起きたことを公式に否定する報告を書くことは予期していないだろう。ニュース・ストーリーの「諸事実」は、以下のようなことである。ある飛行機が午後2時にEllen Parkで墜落した。その時、一つのエンジンに火がつき、別のエンジンが停止した。二つの住居に被害を与え、8人の人を殺し、さらに15人の人に怪我をさせた、というものだ。その他のもの全ては増幅される。飛行機の墜落は、とりわけ予期されていなかったもので、記者たちは、「諸事実」を正確に記録するために存在しているのではない。「諸事実」は再構成されなければならないし、情報がより知られるようになれば「諸事実」もより「正確に」なるだろう。実際の出来事は同じであり続けるにもかかわらず、出来事の記述(account)は変化する。あるいは、ニュースの作り手が表現するように、「ストーリーが展開する」のである。この

種類の進行中の変化は、「展開するニュース」と呼ばれるのである(Tuchman 1973: 引用は Smith 1990b:110)。

この文章における記述的手続きは、ニュースとして類型化される出来事という考えによって組織化されている、とスミスは指摘する。その類型化は、日常生活世界において起こっていることと、組織的な一連の行為の間を媒介している。「展開するニュース」とは、進行中の一連の行為が、新しい情報によって修正されるというニュースの類型だ。「展開するニュース」は、出来事から類型化を通して「ストーリー」へ進む、より一般的な手続きの変種だ。タックマンはこの手続きを一般的言明において次のように要約している。「この議論は、以下のことをしつこく示唆する。すなわち、ニュースの作り手は、日常生活世界の問題のある出来事を、[ニュースの]ルーティンの加工と普及に従属される生の素材に転換するために、ニュース-としての-出来事を類型化するのである(Tuchman 1973:125: 引用は Smith 1990b:110)。「日常生活世界の問題のある出来事」を、かれらのルーティンの加工に接続することは、ニュース-としての-出来事を類型化するというニュースの作り手のワークである。この連鎖は、「出来事」から、「類型化」(ニュース-としての-出来事)を通して、組織的な一連の行為に進む。このように設立された諸関係は、「出来事→ニュースとしての類型化→組織的な一連の行為」と図式化される(Smith 1990b:111)。

タックマンが到達したスキーマは、社会学者の探究のワークによって生成されたものとみなされる。それは、前述の、意味することにおけるレベル1からレベル3への移行を含んでいる。スミスは、出来事を類型化するスキーマは、以下のようなやり方で生起するのではないかと示唆する。ニュースの作り手は、ニュース・ルームにおいて仕事をしている最中に、彼らの仕事(ワーク)について話し、異なるタイプのニュースー「スポット・ニュース」「展開するニュース」「継続するニュース」ーについて話す。次に、かれらは、エスノグラファー(タックマン)に、自分たちの仕事について話す。このワーク過程の記述を生み出すことにおいて、かれらは日常の一連のワークで使用される用語を、タックマンとともに関わっている記述の言語ゲームに置き換える。かれらの用語は、指示的に使われるのだ。記述的ゲームは、言葉ーとりわけ実在的(substantive)名詞ーの使用に、対象を指示するよう導く。その対象は、記述のゲームとは独立に同定されえ、その記述の基盤として存在しているとみなされる。タックマン(彼女は新聞の場面においてたくさんの観察ワークを行った)は、この種のワークを自分自身でも行った。記述的ゲームにおいて使用される用語は、それらの用語が記述的場面で意味する時には、オリジナルにおける現象を組織化するための社会学者にとってのモデルになる。記述的に使用される諸用語は、オリジナルの場面における現象を指示していると読まれる。したがって、記述的方法は、あたかもそれが成員の方法ーかれらが自分たちの世界の中で行為する目的のために、その世界を分析し認識する方法ーであるかのように扱われるようになる。記述的手続きによってそこに構成された実体は、仕事(ワーク)をしている最中のニュースの作り手たちにとって同じようなやり方でそこにあるとみなされるのである(Smith 1990b:111)。

社会学的装置としての類型化は、社会学的読みの記述的实践活動が、オリジナルにおける成員たちの社会的実践活動によって生じたものとみなす。記述的文脈において、ニュースは、ある対象を指示しているように見える。類型化は、その対象を、オリジナルの観察や探究から作り上げる。しかし、もしオリジナルの場面や、実践活動のオリジナルの組織化ーそれは、これらのニュースの異なる類型として時々話されることを組み立てるーから始めるとすれば、先に図示したモデルに対応する組織化された一連の行為を見つけられないだろう、とスミスは指摘する。前述したように、ス

ミスとジャクソンは「割り当て」に対応することから、実際のニュース・ルームの場面の組織化の中に見出すことができなかった。同様に、作動する用語(*working term*)としての「展開するニュース」は、記者や編集者の仕事と、新聞の生産過程や発行などの間の諸関係の、実際の組織化としてのみ定義されうると考えられる。「展開するニュース」という用語は、ニュース・ルームのワークの一部であり、そのワークについて話すことにおいてワークを行うのである。それらの文脈において、「展開するニュース」という用語は特別なやり方で使用されているが、対象を記述するためには使用されていない可能性があるのである。

6-2) ニュース・ルームに関する自らの研究をふまえ、スミスは、「展開するニュース」は、情報過程の組織化によってと同様、新聞が発行される過程との関係におけるその出来事のタイミングによって、組織化されていると指摘する。「展開するニュース」とは、ニュース・ストーリーを作るには十分だが不完全であり、予備的なやり方で報道されるのにちょうど間に合っただけ、その日の新聞に入るような情報である。その展開する特徴は、組織的な一連の行為に先行する出来事の特徴というよりは、ストーリーを不完全として同定する組織化する実践活動から生じて来るのである。典型的には、ニュースとして登録された出来事への情報や反応を生み出す政府などの機関のワークが、「展開(*development*)」と呼ばれるのだ(Smith 1990b:112)。組織におけるワーク過程としての「展開」は、言うなれば、地方記事の編集部が記者にストーリーを追求するよう割り当てる時に生起する。記者は、すでに始まっていたニュース・ストーリーについてのさらなる情報に関わる政府機関に電話をかける。求められるべきさらなる情報は、もしそのさらなる情報が得られた時、それが、「展開」になる。出来事の状態それ自体は、全く変わっていない。関連する機関が、今や、前に公表されなかった情報を公表しようと決めるかもしれない。展開するニュースは、「その外に」存在するニュースの類型ではないとスミスは指摘する。それは、組織あるいは組織間の一連の行為(情報源である諸機関による情報公表のタイミングを含む)と、新聞の発行スケジュールとの特定の接合点(*conjunction*)に「存在する」のである。

同様に、「スポット・ニュース」もまた、組織的過程における特定の一連の行為として捉え直すことができる。「スポット・ニュース」は警察ラジオ、ラジオのネットワーク放送、そのほかの報告のモニタリング(*monitoring*)から始まる連鎖において生起する。このことは、スミスらが地方記事の編集部で観察した新聞においてなされる、ルーティンの注意の継続的過程であった。時々、ある出来事が、実際の場所へ行くために、記者そして可能ならばカメラマンの直ちに素早い動員を求めていると同定される。この過程において、カテゴリー化の手続きが介在する余地はないのだとスミスは言う。その出来事は、最初に「スポット・ニュース」として同定される必要はない。むしろ、「スポット・ニュース」は、新聞それ自体のペースとタイミングとの関係で定義されるし、そうした関係でのみ定義されうるのである。それは、記者にその場所において出来事を観察し報告することを求めるニュースである(Smith 1990b:112)。

ニュースの一つの類型として、「スポット・ニュース」は新聞と他のニュース・ソースの間の社会諸関係において生起する。それらは競合的だとスミスは指摘する。新聞と他のニュース・ソースは、それらが同じ時間帯に発行される場合には互いに直接競っている。素早く展開し人々に利用可能な出来事は、ニュース・システムに非常に素早く供給される。ある出来事が「スポット・ニュース」として形作られることにおいて鍵となるのは、互いに競争している新聞と他のニュース・ソースの関係におけるニュースの特徴であり、ニュース過程のタイミングの特徴である。モニターから

出てくる出来事の一新聞の生産過程との関係における—タイミングと、競合するニュース・ソース—それらもまたその出来事をニュースとして取り上げる—の時間帯もまた、スポットニュースの構成要素だ。もしある出来事が、ニュースを締め切りまでに新聞に入れるために、記者たちを他のストーリーから引き上げるよう動員することを要請したり、計画されたレイアウトを再組織化する可能性を要請するものであるならば、午後に印刷される日刊紙においては、その日の早い時間にモニタリングの過程から聞こえてきた方が、その日の遅い時間に出てくるよりも、よりルーティンのやり方で報道されうるのである (Smith 1990b:113)。

タックマンは、ニュースを社会的に構築された現象として位置づけようとした。したがって彼女は、その場面における現象の明確な (determinate) クラスを同定するために、カテゴリーの基準を確立しようとしたわけではなかった。それにもかかわらず、彼女の方法は、記述的言語ゲームの要請に従っていたのだとスミスは指摘する (Smith 1990b:114)。彼女は、「類型化」という装置を、そのカテゴリーに一致する「実体」を構築する方法として使用する。「展開するニュース」という彼女の記述は、それを一つの類型として定式化する。それによれば、「展開するニュース」は、「創発的状況」に関わるニュースであり、そこでは、情報は不完全であり、出来事の記述 (account) はそれを報告する過程で変化していくのである。タックマンの方法はまた、類型化の基礎を、場面の成員たちの実践活動であり、かれらの実践活動において生起する世界についての、成員自身の知識の中に注意深く置く。自分たちが仕事をやるやり方についての情報提供者の知識は基本的な資源であり、彼女の方法論的基盤でもある。だから、類型化の手続きは、場面の成員の実践活動としての場面の組織化に帰されるかもしれない。しかしながら、彼女のワークのこのような方法論的洗練は、それ自体の罨を持つのだとスミスは言う。その罨は、「割り当て」という概念を念入りに作り上げる時、スミスらが最初に歩んでいったまさにそのものであった (Smith 1990b:114)。

諸用語が与えられる時、記述的言語ゲームの指示的使用すなわち類型化の装置が、それらの用語に対応する現象を構成する。このような様式で用語の秩序を生成することにおいて、ある出来事は、組織的一連の行為の過程に先立ってその過程とは独立している何かとして構成される。出来事は、弁別的な特徴を持ち、行為の対象になりうるようになる。しかしながら、私たちはむしろ異なるやり方で、諸用語を取り上げなければならないとスミスは主張する。それらは、作動する用語なのだ (working terms)。「ニュース」を話すことはいかにして可能か、新聞の断片を指すことはいかにして可能か、一連の行為を記述することはいかにして可能か、「割り当てること」を遂行することはいかにして可能かという問いの解決は、これらの瞬間をある類型として組み立てることによっては見出すことができないのである。むしろそれは、これらの用語の使用が現在の意味を生み出す文脈における社会諸関係を解明することによって、初めて見出すことができるのである (Smith 1990b:115)。

## 7 おわりに

ニュースの社会的組織化をめぐるナンシー・ジャクソンとの共同研究の中で、スミスは、「社会学的記述は、それが表象していると主張している出来事を文字通りの意味で指示していない」という問題に改めて取り組む機会を得た。スミスは、記述のカテゴリーをそれらカテゴリーが記述する (とされる) 場面の中に位置づけ直し、それらを第一次的 (primary) レベルで捉え直すことによって、この問題から新たな社会学的探究の論点を導き出した。ここで第一次的レベルとは、オリジナルに

におけるそれらのカテゴリーの使用—その場面の社会諸関係を表現するものとしての—のレベルである。オリジナルの場面において、それらのカテゴリーは非決定という問題を抱えてはいない。その場面において、カテゴリーの使用は(概して)記述的でならない。カテゴリーと出来事の非決定という問題が生じるのは、エスノグラファーと情報提供者の間の、あるいは、情報提供者としてのエスノグラファーと専門的言説の間の、専門化された関係の中においてのみなのである。

「はじめに」でも述べたように、この論考においてスミスは、社会学的記述の言語ゲームと日常世界のオリジナルの言語ゲームとの二重の関係を理解する時に、同時に、以下のことも理解し始められると主張していた。すなわち、第一に、いかにして私たちは、記述によって意図されるアクチュアリティに、その中でその記述が生じるころの関係の特徴を帰属させてきたのかということであり、第二に、いかにして私たちは、日常生活の言葉の使用を(支点)とする別の記述戦略へ進むだろうかということである。この論点は、スミスの *institutional ethnography* における主題として引き継がれており、「institutional な言説」(上谷 2000c)と「ワーク・ノレッジ」(上谷 2019)という異なる知識の社会的組織化のあり方や、両者の非対称的な関係を解明するための着眼点になっていると考える。

二つの分離された言語ゲームの背後では、定式化された専門的言説や官僚的過程と、生きられた経験の世界が対立している。定式化された専門的言説や官僚的過程は、生きられた経験の世界を、institutional な言説の概念的実践的管轄の内部で、名づけ、管理し、コントロールし、組織化しようとする。しかしながらこの「分離」や「対立」は通常は見えなくされているのである。この論考でスミスがタックマンの仕事を再考しながら示したのは、ある記述を通してオリジナルな場面に引き返す (track back) 可能性、別様に社会的記述を行う可能性である。社会学的記述の言語ゲームと日常世界のオリジナルの言語ゲームとの二重の関係における根本的な「問題」に見えたことからは、社会学的記述の異なる基礎のために必要な基盤として捉え直すことができる。オリジナルの場面の社会的組織化は常に必然的に、記述の中に「存在」する。そして記述は、オリジナルの場面の社会的組織化を解明しないが、それに依存しているのである。スミスの *institutional ethnography* は、この隠された存在を記述するやり方を見つけることによって、二つの分離された言語ゲームの非対称的な社会関係を解明しようとするのである。

## 参考文献

- Jackson, Nancy S. (1974) 'Describing News: Towards an Alternative Account,' M.A. thesis, Department of Anthropology and Sociology, University of British Columbia.
- Smith, Dorothy E. (1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*, Northeastern University Press.
- — — (1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*, Routledge.
- Tuchman, Gaye (1973) 'Making News by Doing Work : Routinizing the Unexpected', *American Journal of Sociology* 79(1).
- — — (1976) 'Telling Stories', *Journal of Communication* 26(4) autumn : 93-7.
- 上谷香陽(2010a)「ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題——institutional ethnography という視点」『ソシオロジスト』12(1) pp.73-96. 武蔵社会学会。
- — — (2010b)「対話としての『経験』——ドロシー・スミスの視点」『武蔵大学総合研究所紀要』no.19, pp.117-133. 武蔵大学総合研究所。

- — — (2017a)「日常生活世界から社会を知る方法——ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点——」『文教大学国際学部紀要』27(2)pp.1-16. 文教学部国際学部。
- — — (2017b)「日常生活世界の記述可能性——ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点——」『文教大学国際学部紀要』28(1)pp.1-22. 文教学部国際学部。
- — — (2018a)「テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード——ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって」『文教大学国際学部紀要』28(2)pp.1-20. 文教大学国際学部。
- — — (2018b)「社会を知るもう一つのやり方——ドロシ・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』29(1)pp.1-18. 文教大学国際学部。
- — — (2019)「ドロシー・スミス Institutional Ethnography におけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)pp.1-16. 文教学部国際学部。
- — — (2020a)「研究ノート：経験を語る二つの様式の断絶—知識の社会的組織化をめぐるドロシー・スミスの着眼点—」『文教大学国際学部紀要』30(2)pp.55-68. 文教学部国際学部。
- — — (2020b)「研究ノート：「社会」という言葉を使って Society について考えるということ—柳父章の翻訳日本語論を手がかりに—」『湘南フォーラム』24pp.109-122. 文教大学湘南総合研究所。
- — — (2020c)「ドロシー・スミスの社会学における institutional discourse について」『文教大学国際学部紀要』31(1)pp.1-14. 文教学部国際学部。